



遅ればせながら映画「マイケル」を見てきた。マイケル・ジャクソンの軌跡を描いた映画。世界中から集まった約二百人の候補者の中から選ばれたのは演技経験もなくプロダンサーとしてのキャリアも持たないジャファーだった。彼はマイケルの兄ジャーマイン・ジャクソンの息子、マイケルの実の甥にあたる。演技のトレーニングは約二年に及んだ。そのトレーニング方法が素晴らしい、「まずは演技とは何かを理解するところから始めたそう。それを一年続け、そこから本格的にマイケルとは何者かを探った。ダンスやしぐさをまねする前に彼の人間性を理解する必要がある。と向き合い続けた日々を送ったようだ。

吉田 いくよ

今年の年間テーマは：駆ける

馬編の漢字（駆・駒・駐・験・驚・騷・馳・憑・駅・騎）をテーマにお届けします。

鈴木 俊子

馳せる。思いを馳せる。

八月だからでしょうか。親しい人、懐かしい人それとも会えない人に思いを馳せます。七月は亡き父の命日があり、父を思い出しております。父が他界し二十数年、月日は瞬間間です。昭和の頑固親父の代表のような父。無口で、感情表現が下手で、いつも理由なき不機嫌。不機嫌な訳ではなかったと知ったのは、私が少し大人になってからです。普通にしているても不機嫌そうに見えてしまうのは、昭和の男だからでしょう。一方で、私たち三人の子供への愛情は、様々な場面でひしひしと感じていました。不器用ながらの愛情表現です。懸命に働いて、懸命に私たちを育ててくれたのだ。今になると知る事ができます。幼少期から小学生ぐらいまででしょうか、家族旅行は毎年出かけていました。我が家の自家用車は父の勤務先の車です。厳密には自家用車ではありません。夏の定番は那須方面、父の一番のお勧めは、北温泉です。りんどう湖ファミリー牧場へ行きたいのに、そこを素通りし、誇らしげに連れて行ってくれたのは渋い北温泉。今でこそ秘湯として全国に名を轟かせていますが、当時は本当に鄙びた温泉宿でした。一番記憶に残っているのは、天狗のお面と、玄関前の大きな温泉プール。これは今も何も変わっていません。

小学一年生夏休み、まだ小さかった弟は母と留守番、父と娘二人で泊まりに出かけたことがありました。ドライブとお出かけの楽しさより、母と離れる不安の方が大きかった六歳の私。汗だくで姉と私の世話をする父。数十年前の記憶に思いを馳せると、まだまだ若かった父の顔と、山間の温泉の空気や景色が目に見えそうです。暮れていく一日、山の夕方の静けさと夏の匂い、慎ましく滋味深く穏やかな食事。まだ小さかった私にはそのおいしさを知ることができませんでした。父娘三人の夏休み、少しだけ大人になった思い出の夏です。思いを馳せる…。過去への旅ができる八月です。



澤村 亜輝

「馳（は）せる」という言葉を口にするとき、私たちの心はいつも、いま居る場所を少しだけ踏み越えて遠くへ飛んで行くような気がします。この漢字の成り立ちを紐解くと、左側に「馬」、右側に「也」が配されています。古代中国において、しなやかに地面を蹴り、地平線の彼方へと風を切って駆け抜ける馬の姿。それが「馳」という字。馬を走らせる、あるいは自ら馳せ参じるといふ物理的な移動を表す言葉が、時代を経るにつれて「思いを馳せる」「馳走になる」といった、目に見えない心やもてなしの領域へと広がっていったのではないかと思います。私たちが日常で「馳せる」を使うとき、その対象は多くの場合、ここにはないものです。遠く離れた故郷の風景、しばらく会っていない大切な人の笑顔、あるいはまだ見ぬ未来や、過去の二度と戻らない一瞬。身体は確かにこの部屋の椅子に収まっているのに、心だけが駿馬（しゅんま）のように時空を駆け抜け、対象のもとへと届いている。そんな不思議な人間の心の伸縮性を、このひと文字は見事に表現しているのだと思います。また、「御馳走」という言葉にも「馳」が含まれています。かつてはお客様を迎えるために、馬を走らせて四方八方から新鮮で良い食材を集めて回ったことから生まれた言葉のようです。誰かのために奔走する時間と情熱、その目に見えない「駆け巡った距離」こそが、もてなしの真髓だったのでしょうか。

忙しさに追われる日々の中で、私たちはつい目の出来事だけに囚われてしまいがちです。けれど、ほんの少し足を止め、ふと空を見上げて遠くに思いを馳せる、その一瞬の余白こそが、私たちの心に深みを与えてくれるのではないのでしょうか。一字の内に疾風の如き力強さと、時にそっと寄り添う繊細な情緒を宿したような「馳」という字。それは、どこまでも遠くへ行ける自由な心を、いつまでも持ち続けることの大切さを教えてくれている気がします。



国井 明美

キング・オブ・ポップ・マイケル・ジャクソン。全世界を熱狂させた彼の生涯を追った伝記映画「Michael マイケル」に、大きな衝撃を受けた。今、何も手につかないほど頭の中がマイケルでいっぱい。改めて彼のことを調べたりアルバムを聴きながら、今月のテーマ、マイケルに想いを「馳」せることにした。

というのも私が知っているマイケルは、整形や薬物依存などスキヤンダルにまみれ、あの白さも、黒人を捨て白人になりたいがゆえのものだと思っていた。か細い声でマスクミ対応する姿に奇怪な行動、マスク越しでもわかる一直線の細い鼻……。結局人は富と名声を手に入れたら、最終的に容姿や快楽に溺れてしまうものなのだと、メディアが煽る記事のま「変人マイケル」の記憶しかなかった。

極貧家庭に生まれたマイケルは、幼少期から大人顔負けの見事なステップと完璧な歌声で、八歳で兄たち四人とジャクソン5のステージに立つ。しかし父親から容赦ない厳しい暴力と「家族」という名の絶対的な支配で、のちに彼は父親の姿を見ただけで嘔吐するほどトラウマになっていた。特に「ビッグノーズ」「デカ鼻」と容姿を罵倒され続けたことが、整形への引き金になったとは残酷だ。尋常性白斑という難病に苦しんでいたことも、絶頂期に生死を彷徨う大火傷を負ったことも私は知らなかった。天才の光と影……。スクリーンが全てではないが、孤独で満身創痍の状態であったことが想像できた。

何より特筆すべきはマイケルを演じた実の甥ジャファー・ジャクソンだ。単なる模倣にとどまらないダンスパフォーマンスは圧巻で、華麗なステップや代名詞であるムーンウォークもほぼ完璧に演じきった。おもしろいことに、後半になればなるほど、ふとした表情までマイケルに見えてくる。マイケルの唯一無二のカッコ良さを、十分に表現してくれた。

孤高の表現者マイケル・ジャクソン。今なお新しい彼の熱いビートを、この夏は皆さんも全身で感じてみては？

【編集後記】

夏の日差しがまぶしい季節となりました。暑い日が続きますが、体調に気を付けながら素敵な夏をお過ごしください。